

原著論文

高等学校「体育理論」領域における授業作成の試みに関する研究
—単元「ドーピングとスポーツ倫理」の授業評価尺度の開発を通して—

松田 広

福山平成大学 福祉健康学部
(健康スポーツ科学科)

【要旨】

2009（平成21）年、「高等学校学習指導要領解説保健体育編・体育編」が公示され、「体育理論」の授業実践の確実な定着が求められている。そして、運動やスポーツを「する」ことだけでなく、スポーツの文化的価値を学ぶことも求められている。したがって、運動やスポーツの仕方、運動やスポーツの原理や原則、スポーツの文化的意義を理解させる、体育を実現させていくには、「体育理論」を学ぶことは極めて重要であるといえる。そこで、現代のスポーツの特徴的な内容に関する先行研究と「体育科教育」領域の先行研究について検討した。その結果、オリンピックムーブメントとドーピングを取り上げ、倫理的な基準を設けることが大切であること（真田，2008）や、スポーツの価値を保護する上で、アンチドーピング教育が有効であること（依田・北村，2012）が導出された。そして、ドーピングは選手の健康をそこねるだけでなくスポーツ倫理に反し、薬物の濫用が社会悪の温床になる卑劣な行為であること（友添，2012）が明らかになった。しかし、ドーピングの背景などを多面的に示し、学習指導が工夫された授業実践が極めて少ないことが示された。そこで本研究は、「体育理論」領域の「ドーピングとスポーツ倫理」単元の授業において、単元の教材をつくり、単元「オリンピックムーブメントとドーピング」を基に作成し、授業実践を通して、その作成した教材で授業評価を行った。具体的には、「授業評価尺度」を作成し、実証授業を行い、データの収集および分析を行った。その結果、3因子中、2因子からは差異がみとれたが、他の1因子からはみとれなかった。このことから、開発教材の再度の修正・改善が必要とされた。その課題から「スポーツの意義や価値」を早い時期より育んでいける、学習内容の系統性を構築し、教材づくりの有効性を高めていく、「体育理論」領域における教材づくりが進められていくことを提案することとした。

KEY WORDS：体育理論，ドーピング，倫理

1. はじめに

「現代スポーツの問題点として、競技スポーツの問題から『勝利至上主義とドーピング』をあげ、大会の賞金やCM契約料で生計を立てるプロのアスリートが誕生し、競技会の勝敗が収入を左右するようになり、一部のアスリートが勝つためには手段を選ばない勝利至上主義がまんえんし、ドーピングをしてでも勝利を得ようとする者があらわれるようになった」(友添, 2012, pp.17-18)と述べている。また、真田(2008)は、「オリンピックムーブメントに関して学ばせる内容は、オリンピックの考えや歴史、オリンピズムの崇高な精神、それを基にスポーツを実践・観戦しながら、異文化を理解すること、その中で、ドーピング問題を取り上げることで、倫理的な基準を設けることの大切さがある」(真田, 2008, pp.10-13)と指摘をしている。これは教育基本法の教育の目標である「幅広い知識と教養を身につけ、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと」に合致するととらえられる。このような中、2009年、「高等学校学習指導要領解説保健体育編・体育編」における指導内容が改訂され、高等学校の「体育理論」領域の指導内容の一つとして「オリンピックムーブメント・ドーピング」といった社会的視点から強調され、「現代スポーツの特徴」として示された。友添(2011)は、「現代スポーツは国際親善や世界平和に大きな役割を果たしており、その代表的なものに『オリンピックムーブメント』があること、また、ドーピングはフェアプレイ精神に反するなど、能力の限界に挑戦するスポーツの文化価値を損なわせる」(友添, 2011, pp. 74)と述べている。このことは、重要な指導内容の一つとしてとらえられる。

そこで教育の目標を達成する視点からも、アンチ・ドーピングやフェアプレイの精神を学ぶことのできる授業実践が求められる。依田・北村(2012)の先行研究は、『『ドーピング知識とスポーツ観の研究』から、スポーツの価値を保護する上で、アンチドーピング教育が有効である』(依田・北村, 2012, pp.29-40)。学校教育で地道に学習しドーピング問題の正しい知識や意識を育てて行くことは、スポーツに対して健全な考え方を形成し、スポーツの価値を高める力になると考えられる。上述してきたことから、以下の4点の課題が示される。

①高等学校において、オリンピックムーブメントとドーピングを学習することは、倫理的な基準を設けることの大切さを学ぶことが求められる。

②高等学校においてオリンピックムーブメントとドーピングの正しい知識や意識を育て、スポーツの価値を高めることが求められる。

③高等学校においてオリンピックムーブメントとドーピングやフェアプレイ精神を学ぶための学習指導の工夫が求められる。

④高等学校において、確実な授業実践が求められる。

この課題から、本研究は、「体育理論」の授業実践の研究が求められることと、「体育理論」領域における社会的視点から「ドーピングとスポーツ倫理」単元の授業実践が求められることの問題意識から「体育理論」領域の「ドーピング」単元の授業において、単元の教材をつくり、単元「オリンピックムーブメント・ドーピング」の事例を基に作成し、授業実践を通して、その教材の授業評価のための「授業評価」尺度を作成してその授業評価から課題を導き考察し、「体育理論」領域における教材づくりに向けての提案する。

2. 先行研究の検討

「体育科教育」領域の先行研究から、近藤・長谷川(2005)は、「大学生における『ドーピングの意識調査』から、将来の指導者としても、アンチドーピングの意識を向上させなければならない」(近藤・長谷川, 2005, pp.191-198)と述べている。これは、高等学校の保健体育科の教師、大学教育機関の責任として、ドーピング学習の授業実践が期待されることが推察できる。また、宮崎(2012)は、『『体育理論』の授業実践を行いアンチドーピングの活動とフェアプレイ精神にふれられている』(宮崎, 2012, p.13)また、アンチ・ドーピングの活動や精神についての学習はなされていたが、ドーピングやそれに対する取り組みについては別単元で授業が設定されていた。このことから、極めて重要な学習内容としてとらえられたと推測し、今後、「体育理論」における「オリンピックムーブメントとドーピング」単元の確実な授業実践が求められると同時に、「体育理論」領域に関する教材研究進め、授業への期待と必要性がうかがえる。

3. 教材づくりの基本的視点

教材づくりの基本的視点として、岩田(1994)は、「教材づくりの基本的視点とは何か、これは、つくられる教材が含み持っているべき本質的性格・条件・つまり『よい教材とは何か』という問題である。一般に

教授学分野では、教材の持つ『典型性』と『具体性』、あるいは『内容的性格』と『機能的性格』といった視点から追求されてきている」これらの表現は異なるが、その中心的な意味内容を以下に示した。

(1) その教材が、習得されるべき学習内容を典型的に含みもっていること。(岩田, 1994, p.30) 教材には、子どもに習得させたい認知的・技術的、そして社会的行動の学習内容が明確に盛り込まれている必要があり、教材づくりの際には、どんな能力を育てたいのか、そのために何を教え学ばせるのかについて思考が必要で、教材づくりにおける「内容的視点」という表現をしている。

(2) その教材が学習者の主体的な諸条件に適合しており、学習意欲を喚起することができること(岩田, 1994, p.30)。

これは、たとえ、内容的視点の検討から学習内容の分析・抽出が明確で、論理的に妥当なものであっても、構成された教材が実際に子どもの学習意欲を喚起しないようなものであれば、教材としての機能が十分発揮されない、子どもの学習意欲を喚起するために、岩田(1994)は、下記の視点に注目をしている。

(1) 子どもの興味・関心に配慮しながら、その能力発達の段階に応じた課題が提示されるべきであること。

(2) すべての子どもたちに技能習熟における達成やゲームでの勝利の機会を保障すること。

(3) 取り組む対象が挑戦的で、プレイ性に満ちた課題であること(岩田, 1994, p.31)。上記の視点に注目し、これを「方法的視点」と表現を用いている。また、林(1992)は、「教育内容として何を学ばせるか、何を習得させるか、ということがなくてはならない。教材は学習内容を習得するための材料(手段)あるから、教材の中に習得させるべき内容が典型的な形で含まれていなければならない。いくら子どもが熱中し、楽しく、活発に取り組む教材でも、その教材の中に意味のある学習内容がなかったならば、よい教材とはいえない。また、学習者からその教材を考えた時、子どもたちの学習意欲を喚起するという方法的な視点がなくてはならない」(林, 1992, p.15)

上記において林が指摘しているように、教材づくりは、学ぶべきものは何なのかというような「内容的視点」の検討を行いつつ、同時に子どもの学習意欲の喚起をうながしていくという「方法的視点」からも工夫されることが求められる。

これは、運動学習における教材づくりの視点ではあるが、教材づくりを行っていくためには、まず、学習内容を明確(内容的視点)にし、学習内容を抽出する。また抽出した学習内容を学習者が学習意欲を喚起(方法的視点)するように、教材(何で教えるのか)を作成することは、「体育理論」領域においても教材づくりの視点として示唆を得られるものと考えた。菊(2005)は、「今こそ徹底的に学習者の側に立って彼らのリアルな経験としての「楽しい」学習の発展をカリキュラムとして考えていく必要がある」(菊, 2005, p.53)と述べている。これは、社会的な動向から、体育学習のあり方をマクロの目から議論すべきであると主張をし、学習者の側に立ったカリキュラムを考えることも必要ではないのかということが考えられる。上述したことから、学習者側の視点に立った教材づくりが配慮されなければならないととらえた。下田(2008)は、「学習者の学習意欲がわからないのは、学習者にとって、『その学習が自分にとって必要ないか、または自分にとって関係がない』と感じた場合に起こる」(下田, 2008, p.163)と指摘をしている。これは、学習者の学習意欲の低下は、学習者の内面での「内的必要感」の欠如に原因があり、教材と学習者の内面との「内的関係性」の薄さにも原因があるとを示している。このことから、教材が指導者から学習者に与えられた場合に特に起こりやすいと考えられる。上記のことから、教材づくりを行う場合、重要なことは、教育的な意図が明確であるのかということであり、生徒の学習意欲を喚起し、どのような学力を獲得させ育成して行くのかを教師は明確にして、教材づくりを進めていくことが望まれる。

4. 本研究の目的

本研究は、「ドーピングとスポーツ倫理」単元の授業実践が求められることの問題意識から「体育理論」領域の「ドーピング」単元の授業において、単元「オリンピックムーブメント・ドーピング」の事例を基に作成し、授業実践を通して、「授業評価」尺度(4因子分析)を作成してその開発した教材の授業評価から成果と課題を明らかにすることとした。

5. 本研究の課題と方法

本研究の目的を達成するための課題として、以下の3点を設定した。

【課題1】単元の教材を作成するため、体育科の授業に

おける教材づくりの基本的視点を整理する。

【課題2】単元「オリンピックムーブメント・ドーピング」の教材のワークシート・プレゼンテーション資料を作成する。具体的には単元における指導内容、授業の構成を明らかにする。方法として「ドーピング」単元における実証授業（授業実践）を行う。具体的には、授業の対象・進め方・データの収集及び分析をし、その結果と課題から考察し、「体育理論」領域における教材づくりに向けての提案する。

6. ワークシート・プレゼンの作成

本研究は、「ドーピング」単元において、実証授業を進めていく上で、開発した単元の教材を作成しなければならない、また、実証授業を行う上で、比較されるための従来通り単元の教材も作成しなければならない、従来通りの単元をA単元、開発した単元をB単元とし、ここでは、A単元とB単元の授業で用いるワークシートを作成する。石橋（2008）は、「社会科の教材については、その使用目的によって「修得教材・習熟教材・評価教材」に分類することができ、修得教材は、資料集、ワークシート、書き込みノートなど、生徒が授業の目標や内容を修得できるものである」と指摘している。これら社会科の教材づくりの上で配慮すべき視点を参考とした。上述したことを配慮し、B単元「オリンピックムーブメントとドーピング」の内容を教材化したもので作成した。また、授業者と事前の打ち合わせの中でもB単元の修正を行うとともに、授業実践に参加しVTR撮影による授業記録をとり、ワークシートの流れで授業を進行していった。また、石橋（2008）は、「ワークシートは学習の過程に沿って教職員が作成することも少なくないが、学校の教材として市販されているものもあるし、問題解決の過程をとったり、サブノータ的な形態のものもある」と指摘をしている。このことから、生徒がB単元「オリンピックムーブメントとドーピング」における学習内容を習得するために、興味・関心を喚起し目標達成までの過程での理解を容易にするワークシートの作成を行った。作成については、上述した社会科におけるワークシート（修得教材）作成時の次の留意点を視点とし作成した。

- ①興味・関心を引き出すものになっているか
- ②生徒が理解できる平易なもので記されているか
- ③最新のデータに基づいて作成されているものか
- ④客観的な事実に基づくもので偏向していないか
- ⑤基礎的・基本的事項を確実に定着できるものか
- ⑥生徒の観察力、資料活用能力、思考力、判断力、表現力などを高めるものなのか
- ⑦生徒の興味・関心や発展的な課題を誘発できるものか、⑩平易な文章で書かれ、それを補完する絵図・写真・グラフなどをビジュアルに用いているか。

（石橋，2008，p.208）

また、パワーポイント（プレゼン）の作成については、ワークシートのグラフ・写真を補足資料として活用する。なお、作成については、石橋（2008）が、「パワーポイントなどのプレゼンは、調べたことをまとめたり表現したりする場合の『発表用教材』として活用するものである」（石橋，2008，p.213）と述べている。これら、社会科におけるパワーポイント（視覚教材）作成時の次の留意点を視点とし作成した。

- ①学習のねらいや過程に沿っているか
- ②生徒に見せたいものや気づかせたいものの視点が明確になっているか③物事の一部を記録したものに過ぎず必ずしも真実とは言えないということを生徒が理解できているか
- ④情報洪水の中で何が大切な教材となるのか適切に選択ができているのか⑤著作権を侵害していることはないか

（石橋，2008，p.213）

さらには、DVD（映像）を視聴することで、社会的事象の一部を切り取ってじっくりと観察したり調べたりできるので、直接体験できない場面をみるためには有効だと考え構成した。また、従来通りのA単元においては、教科書使用（現代高等保健体育：大修館）に記載されている内容に授業を行う教師が手を加えたもので行った。また、同一単元を2時間（50分×2コマ）で配列し、教材としてワークシートとパワーポイントも活用する。使用教科書の目次に従えば次のようになる。（表2）

表2 授業内容

	授 業 内 容	
	A 単元（従来通り）	B 単元（開発）
1 時間・2 時間	(1) ドーピングとスポーツ (2) ドーピングの始まりと歴史 (3) 求められるスポーツ倫理	(1) トップアスリートの写真や記録を見て考えてみよう (2) ドーピングは何故なくならないのか考えてみよう (3) ドーピング（禁止薬物）への誘惑 (4) いまのドーピング（禁止薬物）の現状は

7. 単元の授業構成

前項では、「ドーピング」単元における授業内容を明確にした。この項では、前述で示した授業内容を基に「ドーピング」単元における授業構成を進めていくこととする。岡崎（2010）は、『『体育理論』の授業では、テストのための知識を教えるだけの授業であったり、高度な専門用語や詳細な知識の記憶量を要求するだけの授業であったりしてよいはずがない』（岡崎，2010，p.222）と述べている。このことから、学習内容の習得に向けてどのような題材を選び、学習内容をどのように設定するのかは、授業の善し悪しに大きく影響するものと考えた。このことから、本研究において、次のようにA単元とB単元の授業を構成した。従来通りのA単元においては、使用教科書（大修館）に記載されている内容に授業を行う教師が手を加えたもので行うこととし（表2）の内容で構成されている。また、開発したB単元の学習する内容については、国際大会やオリンピック大会へ出場するトップアスリートやプロのトップアスリートに取り巻く背景に、意図的に誰が誰に対してドーピングをさせようとしているのか、現状はどうなっているのか、また、これらを払拭するためにはどのような事が考えられるのかを視点を含め構成した。

表3 授業構成

A 単 元
①オリンピックにおける賞金等を紹介する。 ②ドーピングの頻発理由に触れる。 ③ドーピングの種類をワークシートに記入させる。 ④制裁や副作用についても触れる。 ⑤ドーピングの歴史を説明する。 ⑥ドーピングに手を染める背景について触れる。 ⑦ドーピングの禁止理由を考えさせる。 ⑧ドーピングの禁止理由となくならない背景について意見交換し考えを深めさせる。 ⑨個人に求められる倫理観について考えさせる。 ⑩社会に求められる倫理観について考えさせる。 ⑪フェアプレイ精神とスポーツ倫理について触れる。 ⑫スポーツ文化を守る必要性について考えさせる。
B 単 元
①競技スポーツのトップアスリートが世界の頂点を目指すのは何故なのか。②ドーピングとは、どのような行為なのか。③何故、精神や身体への代償を払ってでもドーピングに手を染めるのか。④ドーピングにはどのような禁止薬物・方法があり、制裁はどのようなことなのか。⑤禁止薬物の副作用にはどのようなことがあるのか。⑥DVD映像の視聴。⑦ドーピングは未だ何故なくならないのか⑧ドーピングをなくすためにはどのような事が求められるのか。

従来通りのA単元においては、内容を以下のように3段階に分けた。

- (1) ドーピングとスポーツ（競技スポーツで得られるモノについて考える。ドーピングがなぜ許させないのか、また、なぜなくならないのかについて考える）
- (2) ドーピングの始まりと歴史（ドーピングの歴史や実態を知る）
- (3) 求められるスポーツ倫理（スポーツの倫理観について考える。スポーツ倫理の必要性を知る。スポーツに求められるものはなにかを考える）と構成し授業過程とした。また、開発したB単元における授業過程は、以下の4段階（ワーク1～4）で進めることとした。ワーク1では、プロのアスリートの写真と記録から、また、MLBのプロ選手と陸上短距離選手の記録や写真をもとに不思議さに気づく段階。ワーク2では、トップアスリートやメダリストは名声や高額な収入があることに気づく段階。ワーク3では、もし、自分が当事者としてどのような対応ができるのか、またディスカッションし様々な視点から意見を交換し考える段階。ワーク4では、映像視聴をもとにリアルな実情から、この状況を払拭するためには、どのような事が求められるのかでまとめる段階、とし実証授業の過程とした。（表4）

表4 ワークの一部



8. 「授業評価尺度」評価表の作成

ここでは、「ドーピング」単元におけるA単元とB単元の比較検討をするための、「授業評価尺度」の作成することを目的とする。授業の効率化や授業の改善を図っていく上で、授業評価は重要な役割を果たすものと考えられる。例えば、吉野（2010）は、「より質の高い授業が実践できるようになるためには、具体的に授業の現実を把握できる評価の方法について知る必要があること、また、授業を単に消化するだけではみえないことも、授業

の善し悪しをみる授業評価を適用することによって、授業改善への具体的な示唆を得ることができる」と指摘している。これは、授業評価は授業の良し悪しについて、その価値を判定する営みであり、授業の成果を振り返ることで、指導のあり方の是非について評価をすることと考える。また、授業を実際に受けた子どもに授業を評価させ、これによって、授業改善のための情報を得ようとしたのは、小林（1980）の試みであった。これは、小林の方法が有効ではあったが、評価項目が古い体育観を基に作成されていることから、現行の学習指導要領の体育での目標や内容を中心に検討し、新たな因子構造を導き評価項目を作成しなければならないと考えた。したがって、本研究において、新たに因子構造を導きだし「ドーピング」単元における授業評価の作成に取り組むこととした。

まず、授業評価の先行研究から、「体育理論」の授業評価の重要性を確認する。次に、予備調査を行い、「ドーピング」単元の授業評価に関する記述を収集・精選し、それらをもとに「授業評価尺度」を作成することを目的とする。授業はどのような因子から授業評価されるのか、ここでは授業評価尺度の作成について考えてみたい。岡澤（1997）は、「よい授業かどうかを評価するには、評価が可能である尺度を使用することが必要であるとして、よい授業をどのように定義するのかによって、使用する尺度が異なること」を指摘している。このことは、よい授業の評価をどのような尺度で行うのかを検討されなければならないこと考える。また、小林（1980）は、「1時間ごとの授業評価尺度を、高田氏の『よい授業』の四原則、すなわち、『精一杯運動させてくれた授業』、『ワザや力を伸ばしてくれた授業』、『友人と仲良く学習させてくれた授業』、『何かを新しく発見させてくれた授業』」をもとに作成している。また、高橋ら（1994）は、上記の4項目に新たに5項目を加え、9項目からなる授業評価尺度を作成している。以上のような授業評価尺度は、生徒の視点からみたよい授業のあり方を求めた方法であると考え、「ドーピング」単元における授業評価尺度の作成を試みた。

9. 「ドーピング」単元における「授業評価尺度」の作成

(1) 予備調査

1) 目的

予備調査の目的は、「体育理論」の授業評価に関する記述を収集・精選し、それらをもとに本調査で用いる尺

度を作成することである。

2) 調査対象

県立高等学校2校（M校/Y校）の1年生（約210名）を対象として、単元Aと単元B「オリンピックムーブメントとドーピング」を活用し授業を実施した。

3) 調査内容

「『体育理論』領域における授業評価尺度」の作成

まず、「体育理論」領域の授業研究に用いるために実施するものであることを示した上で、「今回のドーピング単元の授業を受講して、どのような印象を持ちましたか」と「今回のドーピング単元の授業について、意見や感想について」の質問文を教示し、自由記述によって回答を求めた。

4) 調査の実施方法

調査の手続きは、調査対象者の在籍する各高等学校のクラス単位で、保健体育科の授業時間を用いて、保健体育科教諭2名（男性教諭：52歳と34歳）で実施された。質問紙調査は無記名式で行い、調査対象者の回答の匿名性が確保されることを質問紙に明記した。また、調査に対する同意については、質問への回答は自由意志であること、答えられない項目や答えたくない項目は無理に答えなくてよいことを質問紙に明記することによって、得られたものと判断された。これらの方法は、全てのクラスにおいて共通であった。

5) 結果と考察

自由記述の回答の全てを文節単位で抽出し、KJ法を用いて分類した。高等学校の「ドーピング」単元の「授業の印象」と「授業についての意見や感想」に関する記述について、合計で470個を収集した。

その結果、高等学校の「体育理論」領域の授業評価の構成概念として、「学習成果に関する項目（205件）」「気づきや思考に関する項目（137件）」「関心・意欲に関する項目（34件）」「理解しやすさに関する項目（94件）」という4つが見出された。尺度項目の作成はここで見出された各概念に分類された記述内容をもとに行った。その際、内容が類似する記述内容は集約するなど、記述の明確化を図った。このような過程を経て作成された項目は、分類項目は、現職の保健体育科教諭の3名の協力を得て、本研究者と共に検討をし、解りやすい表現となるように修正した。次に、スポーツ科学を専攻する大学院生3名と現職の保健体育科教諭の5名の計8名によって、内的妥当性の検証を行った。内的妥当性の検証は、上記の8名が、各項目を4つの構成要素に分類し、

その一致率によって判定された。検証の結果、一致率が80%未満の項目を修正・削除し、最終的に「ドーピング」単元の授業評価尺度」の項目として24項目が選定された。

10. 「ドーピング」単元における実証授業

本章では、第1章で作成した「ドーピング」単元における、A単元（従来通り）と開発したB単元で授業を行い、作成した「授業評価尺度」の評価表を用いて、授業を分析することで、その成果について実証することを目的とする。具体的には、5名の保健体育科教諭（男性教諭：58歳、59歳、57歳、31歳、女性教諭：40歳）に、A単元とB単元「オリンピックムーブメントとドーピング」での授業を実践してもらい、各授業の終了後に生徒からの「授業評価尺度」評価表を用いて評価を行い、A単元とB単元を比較した際、開発したB単元での授業実践の方が、授業評価において満足されれば良い結果が示されると考える。また、各々教師の授業評価が、A単元よりB単元のほうが、有意に高かったことが認められた結果であれば、一定の成果があったと捉えることができる。さらには、それと同時に課題も提示し、成果と課題から考察を行っていく。

11. 実証授業の調査対象・実施方法

(1) 「授業評価尺度」による評価

実証授業では、予備調査で作成した「授業評価尺度」について、因子構造を検討し、その信頼性を検証した。作成された「授業評価尺度」を用いて、A単元とB単元の比較検討することを目的とする。調査対象については、県立高等学校3校の1年生（507名）を対象として、5名の保健体育科教諭で「ドーピング」単元の授業評価を実施した。その内訳は、3高等学校の1年生、計12クラス、計507名（男子218名、女子289名）であった。そのうち、記入漏れや記入ミスのあったものを除き、有効回答者502名（男子214名、女子288名）を分析対象とした。調査の実施方法について、調査の手続きは、調査対象者の在籍する3高等学校のクラス単位で、保健体育科の授業時間を用いて、実施された。その他の手続きは予備調査と同様の手続きで行った。統計処理には、SPSS（Version20）を使用した。対象者の回答の匿名性が確保されることを質問紙に明記した。また、調査に対する同意については、質問への回答は自由意志であること、答えられない項目や答えたくない項目は無理に

答えなくてよいことを質問紙に明記することによって、得られたものと判断された。これらの方法は、全ての高等学校において共通であった。

調査内容については以下に示した。

(1) フェイスシート

性別に加えて、「ドーピング」単元の授業を中学校の時に学習した経験の有無についての回答を求めた。

表5

項目	1	2	3	4
1. この授業で「ドーピング」の知識を深めた。この授業で「ドーピング」の知識を深めた。	1	2	3	4
2. この授業で「ドーピング」の知識を深めた。この授業で「ドーピング」の知識を深めた。	1	2	3	4
3. この授業で「ドーピング」の知識を深めた。この授業で「ドーピング」の知識を深めた。	1	2	3	4
4. この授業で「ドーピング」の知識を深めた。この授業で「ドーピング」の知識を深めた。	1	2	3	4
5. この授業で「ドーピング」の知識を深めた。この授業で「ドーピング」の知識を深めた。	1	2	3	4
6. この授業で「ドーピング」の知識を深めた。この授業で「ドーピング」の知識を深めた。	1	2	3	4
7. この授業で「ドーピング」の知識を深めた。この授業で「ドーピング」の知識を深めた。	1	2	3	4
8. この授業で「ドーピング」の知識を深めた。この授業で「ドーピング」の知識を深めた。	1	2	3	4
9. この授業で「ドーピング」の知識を深めた。この授業で「ドーピング」の知識を深めた。	1	2	3	4
10. この授業で「ドーピング」の知識を深めた。この授業で「ドーピング」の知識を深めた。	1	2	3	4
11. この授業で「ドーピング」の知識を深めた。この授業で「ドーピング」の知識を深めた。	1	2	3	4
12. この授業で「ドーピング」の知識を深めた。この授業で「ドーピング」の知識を深めた。	1	2	3	4
13. この授業で「ドーピング」の知識を深めた。この授業で「ドーピング」の知識を深めた。	1	2	3	4
14. この授業で「ドーピング」の知識を深めた。この授業で「ドーピング」の知識を深めた。	1	2	3	4
15. この授業で「ドーピング」の知識を深めた。この授業で「ドーピング」の知識を深めた。	1	2	3	4
16. この授業で「ドーピング」の知識を深めた。この授業で「ドーピング」の知識を深めた。	1	2	3	4
17. この授業で「ドーピング」の知識を深めた。この授業で「ドーピング」の知識を深めた。	1	2	3	4
18. この授業で「ドーピング」の知識を深めた。この授業で「ドーピング」の知識を深めた。	1	2	3	4
19. この授業で「ドーピング」の知識を深めた。この授業で「ドーピング」の知識を深めた。	1	2	3	4
20. この授業で「ドーピング」の知識を深めた。この授業で「ドーピング」の知識を深めた。	1	2	3	4
21. この授業で「ドーピング」の知識を深めた。この授業で「ドーピング」の知識を深めた。	1	2	3	4
22. この授業で「ドーピング」の知識を深めた。この授業で「ドーピング」の知識を深めた。	1	2	3	4
23. この授業で「ドーピング」の知識を深めた。この授業で「ドーピング」の知識を深めた。	1	2	3	4
24. この授業で「ドーピング」の知識を深めた。この授業で「ドーピング」の知識を深めた。	1	2	3	4

(2) 「ドーピング」単元の授業評価尺度

予備調査で作成した、「体育理論」領域の授業評価尺度の24項目について、「思う」、「どちらかといえば思う」、「どちらかといえば思わない」、「思わない」、の4件法で回答を求めた。（表5）

12. 実証授業におけるデータの収集・分析

(1) 「『体育理論』領域の授業評価尺度」の探索的因子分析

まず、「『体育理論』領域の授業評価尺度」の24項目について、項目の分析を行った。項目の偏りを検討するため、平均値が1.5以下または3.5以上、標準偏差の極端に小さいもの、頻度に偏りがあるものを検討した結果、3項目を削除した。項目間の相関係数に関しては、

.70を超えるような高い優位な相関があるものは認められなかった。次に、残った21項目について、探索的因子分析（最尤法，Promax回転）を行った。因子負荷量が、.40以下の項目および2因子間にわたって、.40以上の因子負荷量を示した6項目を削除した。残された15項目について探索的因子分析（最尤法，Promax回転）を行い、その結果3因子が抽出された。（表6）

【表 6】「体育理論」の授業評価における因子分析結果（プロマックス回転）と因子間相関

項目	1	2	3
I スポーツ観の変容 (α=.83)			
13. この「体育理論」の授業を通して、スポーツに関する見方が変わった	.78	.19	.04
11. この「体育理論」の授業によって、授業を受ける前からスポーツをやるようになった	.76	.19	.16
20. この「体育理論」の授業では、スポーツについて学びやすくなった	.67	.25	.30
6. この「体育理論」の授業では、授業を受ける前から変わった	.65	.12	.30
II 学習意欲の喚起 (α=.81)			
9. この「体育理論」の授業では、自ら学びたいという意欲が湧いて来たことがあった	.70	.08	.02
23. この「体育理論」の授業を通じて、スポーツに興味を覚えたことがあった	.61	.07	.00
14. この「体育理論」の授業では、学ぶ意欲が湧いた	.61	.38	.05
3. この「体育理論」の授業では、授業を受ける前から変わったことがあった(9)	.61	.38	.09
7. この「体育理論」の授業では、授業を受ける前から変わった	.59	.48	.14
III 授業内容の把握 (α=.77)			
25. この「体育理論」の授業では、ドーピングとは、競技の公平性を保つために定められていることが分かった	.75	.02	.07
15. この「体育理論」の授業では、ドーピングとは禁断行為であることが分かった	.75	.02	.08
21. この「体育理論」の授業では、ドーピングはスポーツのフェアプレイの観点から禁止されていることが分かった	.74	.12	.08
24. この「体育理論」の授業では、授業を受ける前から変わった	.71	.31	.29
18. この「体育理論」の授業では、授業を受ける前から変わったことがあった	.71	.76	.38
8. この「体育理論」の授業では、授業を受ける前から変わった	.67	.34	.68
因子間相関			
I - II	.40	.54	
I - III		.40	
II - III			.76

続いて、項目の特徴から抽出された3因子について命名を行った。第1因子は、「スポーツに関する見方やとらえ方の変化」や「スポーツに関する思考する場面」の項目を含んでおり、スポーツの本質にふれるような内容が示されていることから「スポーツ観の変容」と命名した。第2因子は、「授業への積極的な参加」や「スポーツに積極的に関わりたい」などの項目を含み、学習に対する意欲やスポーツに対して興味・関心の高まりが示されていることから、「学習意欲の喚起」と命名した。第3因子は、「ドーピングについて様々なことが学べた」ということや「授業の目標が明確」などの項目を含み、学習するねらいが明確で、ドーピングについて学べたなど、学習内容に関連したことが示されていることから「学習内容の把握」と命名した。このように、「ドーピング」単元の授業評価尺度」の因子分析によって、「ドーピング」単元の授業において、教材を工夫・開発して授業を行うことによって、スポーツへの興味や関心を抱き、学習への意欲が喚起され、学習内容の習得への積極的な取り組みがみられ、スポーツ観の変容へと導かれることが見出された。

(2) 尺度の信頼性の検討

「ドーピング」単元の授業評価尺度の内的―一貫性を

検討するため、「ドーピング」単元の授業評価尺度の下位尺度について、信頼性係数としてCronbachの α 係数を算出した結果（表6），第1因子は $\alpha=.83$ ，第2因子は $\alpha=.81$ ，第3因子は $\alpha=.77$ ，であった。3因子すべてについて、.70以上の α 係数が算出されていることから、「ドーピング」単元の授業評価尺度の3つの下位尺度には十分な内的―一貫性があることが確認された。以上の分析は全て下位尺度ごとに得点を算出し、分析を行った。なお、尺度全体の α 係数は.85であった。

13. 実証授業の結果および考察

ここでは、「ドーピング」単元の実証授業におけるA単元とB単元の比較から得られた結果を総括して、本研究の目的に照らした成果の確認および考察をし、課題の抽出を行う。

(1) 生徒（学習者）による「授業評価」

作成したB単元とA単元（従来通り）教材を第2章の第1節で作成した「授業評価尺度」によって評価を行い、生徒（学習者）による「授業評価」から3因子が導かれた。第1因子は、「スポーツに関する見方やとらえ方の変化」や「スポーツに関する思考する場面」の項目を含んでおり、スポーツの本質にふれるような内容が示されていることから「スポーツ観の変容」とした。第2因子は、「授業への積極的な参加」や「スポーツに積極的に関わりたい」などの項目を含み、学習に対する意欲やスポーツに対して興味・関心の高まりが示されていることから、「学習意欲の喚起」とした。第3因子は、「ドーピングについて様々なことが学べた」ということや「授業の目標が明確」などの項目を含み、学習するねらいが明確で、ドーピングについて学べたなど、学習内容に関連したことが示されていることから「学習内容の把握」とした。このように、「ドーピング」単元の授業評価尺度」の因子分析によって、3因子が見出されたことから、この3因子に視点を当て考察をし課題を示すこととする。

(1) 第1因子「スポーツ観の変容」の内容に属するとされる生徒の自由記述から、次のことが示された。

【A単元】

- ①オリンピックにもいろいろな決まりがあることを知らなかった。(6名)②オリンピック（国際大会含）でもドーピングするなんて信じられない。(11名)
③スポーツの面白みがなくなる。(8名)

【B単元】

①ドーピングによってスポーツの在り方が変わってしまうと思う。(9名)②スポーツの裏側が分かった。(13名)③オリンピックでこんなことが起きていたのかと驚いた。(6名)④オリンピック(国際大会)を見る目が変わった。(12名)⑤スポーツへの考え方が変わった気がする。(21名)⑥有名な選手が行っていることがショックで見る目が変わるかも。(7名)⑦実際のスポーツの現状を聞いてショックでがっかりした。(18名)⑧勝利するためとはいえ、ここまで必要性があるのか。(6名)⑨賞金や名誉のためにドーピングをする人が出てくると、オリンピックや世界大会の意味がない。(7名)

上記より、「ドーピング」単元の授業における、「スポーツ観の変容」の内容の項目から、A単元とB単元の違いを確認した。その結果、A単元からは代表される項目3つに対してB単元は9つでまとめられた。また、B単元においては、「見る目が変わる」として具体的な表記が成されている。このことから、有意な差が認められ、いずれもB単元の方がA単元より有意であることが認められた。

(2) 第2因子「学習意欲の喚起」の内容に属するとされる生徒の自由記述から、次のことが示された。

【A単元】

①今まで知らなかったことを学べて良かった。(5名)②多くのドーピングがあるので、今後どうするのが気になった。(17名)③繰り上がりでメダルを獲得した選手の気持ちを知らない。(6名)④アメリカでは高校生が行うと聞き、興味を思った。(12名)

【B単元】

①スポーツの新たなことが分かった。(18名)②ドーピングに様々な方法があることに驚いて、もっと知りたいと思った。(9名)③アメリカでは高校生が行うと聞き、詳しく知りたいと思った。(29名)④以前から興味があり、学ぶ機会となりうれしかった。(24名)⑤スポーツとドーピングの関係を、もっと詳しく知りたいと思った。(26名)⑥授業前後で変わった。(もっと勉強したいと思った)(8名)⑦考えるきっかけになった。(4名)

上記より、「ドーピング」単元の授業における、「学習意欲の喚起」の内容の項目から、A単元とB単元の違いを確認した。その結果、A単元からは代表される項目4つに対してB単元は7つでまとめられた。また、B単元においては、「もっと知りたい(学びたい)」として具体的な表記が成されている。また、「授業前後で変わった」という項目から、授業を受講した結果として、学習意欲が高まったことが推察される。このことから、有意な差が認められ、いずれもB単元の方がA単元より有意であることが認められた。

(3) 第3因子「学習内容の把握」の内容に属するとされる生徒の自由記述から、次のことが示された。

【A単元】

①日本人が今までにドーピングをしていない、ということを知った。(11名)②今まで知らなかったことを学べて良かった。(4名)③今まで以上にドーピングについて知ることができた。(6名)④ドーピングの怖さが分かった。(17名)⑤副作用があることを初めて知った。(6名)⑥ドーピングには薬物ドーピング以外にも種類があることを知った。(19名)⑦授業を受けて知識の幅が広がった(14名)⑧ドーピングという名前は知っていたけど、内容を今日初めて知った。(3名)⑨ドーピングを起こさせない取り組みがあることを知った。(18名)

【B単元】

①今まで知らなかったことを学べて良かった。(27名)②副作用が恐ろしいことを知った。(19名)③様々な言葉を初めて聞き知ることができた。(12名)④選手は勝利したい気持ちが強いのことが分かった。(17名)⑤具体例(例示)をあげて説明があったので理解できた。(14名)⑥授業を受けて知識の幅が広がった。(18名)⑦DVDの視聴で理解度が高まった。(27名)⑧選手の気持ちにつけ込む医師やコーチに問題があることが分かった。(9名)⑨ビジネスのように扱われていることが分かった。(18名)⑩多額の金銭が動いていることが分かった。(28名)⑪きごう生命をかけてでも勝利にこだわるものが分かった。(19名)⑫薬物ドーピング以外に方法が存在することが分かった。(12名)

上記より、「ドーピング」単元の授業における、「学習内容の把握」の内容の項目から、A単元とB単元の違いを確認した。その結果、A単元からは代表される項目9つに対してB単元は13個でまとめられた。また、B単元においては、「具体例(例示)・DVDの視聴」「医師やコーチに問題」「生命をかけてでも勝利」「ビジネスのように扱われている」など具体的な表記が成されている。また、「理解度が高まった」という項目から、授業を受講した結果として、理解が高まったことが推察される。このことから、有意な差が認められ、いずれもB単元の方がA単元より有意であることが認められた。しかし、「スポーツ観の変容」と「学習意欲の喚起」の代表される項目数の差異までの大きさはみられなかった。上述してきたことから、以下のことが考えられる。

(1) 第1因子「スポーツ観の変容」にみられたことは、「見る目が変わる」などの具体的な表記が成された。これは、スポーツの華々しい明るいイメージを持っていて、授業を受講することで、スポーツの裏側のあまり爽やかでない部分を学ぶことで、負のイメージを持ったことは確かであるが、両面を学ぶことで「スポーツ」と関わっていけることが可能になると考える。

(2) 第2因子「学習意欲の喚起」にみられたことは、「もっと知りたい(学びたい)」として具体的な表記が成された。また、「授業前後で変わった」という項目から、授業を受講した結果として、学習意欲が高まったこ

とが推察される。このことは、教材を学習のねらいに沿って、興味や関心を抱くように教材を作成することは、学習内容の習得と同時に「生涯スポーツ」に向けた、知的好奇心の育成につながることを考えられる。

(3) 第3因子「学習内容の把握」にみられたことは、「具体例(例示)・DVDの視聴」「医師やコーチに問題」「生命をかけてでも勝利」「ビジネスのようにあつかわれている」など具体的な表記が成されている。また、「理解度が高まった」という項目から、授業を受講した結果として、理解が高まったことが推察される。このことから、DVD教材により、知識が豊富になることで、講義による知識と結びつけて、事前にある知識と関連づけて考えることができる。また、現実的な事例で紹介されているため、医師やコーチとの関係、スポーツがビジネスのようにあつかわれているなどのリアルな状況から学習する内容が容易に理解できたことが推察される。

述べていったことから、以下の課題が示される。

①スポーツの持つ正のイメージを抱くことは大切なことであるが、スポーツの負の部分も存在していることも事実として、あるいは重要なこととして、正しく認識させる学習のための教材づくりが望まれると考える。

②スポーツのことをもっと知りたい学びたい、学習意欲の向上を図るために、具体的な事例などを持ち込み、知的好奇心をくすぐるような教材を選択しなければならない。また、発問などの回答から具体的な事柄が発言できるような、授業の展開ができる教材づくりが望まれると考える。

③テーマに沿ったDVD教材を活用することは大切であると考え。しかし、学習のねらいに整合するように学習させたい場面を抽出し整理した上で、生徒(学習者)に提示しなければならない。また最新でタイムリーな内容で準備しなければ教材としての価値が薄くなることから、どの流れ(導入・展開・まとめ)でどの場面(知・理、思・判)でどのくらい(時間)提示するかを構成した、教材づくりが望まれると考える。

④因子の差異が見られなかった、開発した教材から「教材の改善」が求められた、鈴木(2002)は、「何を加え、削る、移動、変更」4つの視点を指摘している。(鈴木, 2002, p.130)このことから、4つの課題がみられ、改善する候補になるものが明らかになり、教材の修正点を抽出、改善した教材づくりが望まれると考える。

1.4. 「体育理論」における教材づくりに向けての提案

(1) 「体育理論」における教材づくりの必要性

まず、教師が授業を構成していく時に、「何を、何で、どのように」教えるのかという教授学的な一連の流れの中で考えて進められる。それらは次のように示される。

①授業の目的・目標を検討する。

②学習者の主体的条件及び指導に必要な時間的・物理的な条件を考える。

③学習内容の選択・設定をする。

④学習内容を教えるための教材の構成をする。

⑤学習内容の教授＝学習内容の展開に関する検討をする。(岩田, 1994, p.29)

上述は、教師が事前に準備をして授業を行うものである。これらすべてが広義の教材研究と考えられるが、素材、教育内容、教材を区別する立場から見ると、④「何で教えるのか」が教材研究の中心的課題であるといえる。教材づくりは、狭義な意味での教材研究であり、素材としての「スポーツを加工・改変することによって、教科内容を習得するための教材(学習活動の対象)へと組織しなおすこと」(岩田, 1994, p.30)

しかし、ここで確認しなければならないことは、「体育理論」領域における教材づくりであるため、スポーツを加工・改変するととらえるのではなく、「体育理論」領域における指導内容を何で教えるのかという、学習内容を習得するための教材の開発ととらえることとする。上述してきたように、教材づくりを規定した上で、「体育理論」領域における教材づくりの必要性について考えてみる。「体育理論」領域において扱われる指導内容は、例えば、小山(1993)は、『『オリンピックとは何か』の授業において、近年、商業主義化がされてきたオリンピックに対しての問題点も挙げているが、子どもたちにとって目に入ってくるのは、テレビを通して活躍する選手たちの華やかな姿ばかりで、人類が生みだしたオリンピック運動を正しく認識し、継承・発達していくためにはオリンピックについての学習が必要である」(小山, 1993, p.155)として授業を実践している。このことは、オリンピックという素材を「体育理論」の授業として成立させるために、以下のように授業を構成し教材づくりをしている。

①ワークシートを作成し、大きく3つに分け進めている。②オリンピックは他の国際大会とどこが違うのか、オリンピック大会の独自性とは。③オリンピックの歴史

や精神について学習する。④オリンピック運動の精神から最近のオリンピックにかかわる諸問題について、をあつかった。

(小山, 1993, p.156)

上記の内容には、岩田(1994)が言う、「教材づくりの際には、どんな能力を育てたいのか、そのために何を教え学ばせるのかについて思考が必要で、教材づくりにおける『内容的視点』と、その教材が生徒(学習者)の主体的な諸条件に適合しており、学習意欲を喚起することができる『方法的視点』」を示している。このことから教材づくりの基本的視点がうかがえる。このように、素材としてのオリンピックを教授学的な改変を通して、生徒(学習者)が学ぶための教材に構成されなければならない。また、前項の課題から、教材の改善のための候補となるものは、「記事の見出しだけでの判断」「記事の言葉の理解が困難」「手がかりとなる写真等の順序」「視聴時間の配分」「選手知名度の事例としての活用困難」であったこのことから、理解しやすい用語や資料で示されることが必要である。このことを参考として、「体育理論」における教材づくりの必要性があるといえる。

(2) 「体育理論」における教材づくりの課題

「体育理論」領域において、有効な教材づくりを行う場合、教材の有効性を実証授業によって、開発した教材で授業(予備調査)を行い、その結果から授業評価尺度の作成と教材の修正点を抽出して、再度、教材の修正をして、実証授業を行っていくことが重要であると言える。そして、このようなプロセスを可能な限り繰り返していくことで、限りなく教材づくりの有効性を高めていくことが、可能になっていくことが一つの成果として考える。また、石橋(2008)の「修得教材」のとらえ方から、「最新のデータに基づき作成されたか、客観的な事実に基づき偏向していないか」(石橋, 2008, p.208)について、最新の情報情報と先行研究から、作成したため、興味・関心を引き出せたことも成果ととらえている。一方では、石橋(2008)の「生徒の実生活から理解できるもので」という点では、生徒の平易なもので記してなかったため、学習内容の理解度の大きな差異が見られなかったことから課題が残った。「授業評価尺度」からは、「スポーツ観の変容」「学習意欲の喚起」因子に大きな差異がみられたため、他の単元においても新しい「授業評価尺度」を作成し今後の教材の改善をしていくことも考えなければならない。一方、大きな差異はみられなかった「学習内容の把握」因子の向上を図るための

教材づくりも重要であると言える。また、語彙の表現や授業場面での想起が容易な記述語に再構築することが必要である。「体育理論」領域は授業研究が多くなく、「授業評価尺度」をはじめ、今後、教材研究の検証を進めていくには、「知識・理解」の理解度評価票および、「ルーブリック」における評価で数多くの授業実践で試行されることが必要であると考えられる。さらには、「スポーツの意義や価値」などを学習者に急いで育成するのではなく、各単元において、「はぐくむ(育む)」教材づくりが必要であると考えられる。また、学習者のワークシートの自由記述からも、「ドーピング」や「スポーツ倫理」の学習内容を中学校でも早期に学習することは、「スポーツの意義や価値」を考える上で極めて重要なこととしてあげられた。

以上のように、今後の課題として、教材づくりの有効性を高めていくことが必要であると考えられる。また、そのことに関連して、「体育理論」領域における「授業評価尺度」・「知識・理解」の理解度評価票および、「ルーブリック」評価の作成や、「ドーピング」「スポーツ倫理」に関する学習内容を中学校への導入も検討の一つとしてあげ、その学習内容の系統性からの教材づくりも期待したい。そして、教材づくりの有効性を高めていくことと同時に、「体育理論」領域における授業研究が進められていくことが重要であり、今後の課題としてあげられた。

引用・参考文献

- 阿久津洋巳(2014) 授業評価アンケートは何を評価しているのか。岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要13:245-252。
- 有田和正(1989) 教材発掘の基礎技術。明治図書:東京。
- 学校体育研究同志会(1978) 体育理論の指導。ペースボール・マガジン社:東京。
- 学校体育研究同志会(1993) 体育実践に新しい風を。大修館書店:東京。
- 林恒明(1992) 体育科典型教材づくり。日本書籍:東京。
- 池田達也(2012) 体育理論における演習的学習活動の実践研究。愛知教育大学保健体育講座研究紀要37:55-56。
- 出原泰明(1995) 教室でやる体育授業のひとつの試み。和歌山大学教育学部教実践研究指導センター紀要

- 5:151.
- 出原泰明(2000) 教室でする体育「体育理論」の授業づくり「中学校編」, 創文企画:東京.
- 井筒次郎・鈴木漠(1998) 高等学校における「体育理論」の指導に関する一考察, 日本体育大学紀要27:293-300.
- 岩野晴美(2013) 社会関係の変容と価値との関係を探る社会科授業の有効性の検討, 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要23:177-184.
- 岩田靖(1990) 体育における教材づくり論史, 体育科教育, 38(13):76-79.
- 岩田靖・竹田晴彦(1989) 戦後の体育科教育における教材概念の検討, 筑波大学体育科学系紀要12:49-57.
- 岩田靖(2012) 体育の教材を創る, 大修館書店:東京.
- 加藤橘夫・前川峯雄(1957) 高等学校 体育理論, 世界書院:東京.
- 鎌原雅彦・宮下一博・大野木裕明・中澤潤(1998) 心理学マニュアル質問紙法, 北大路書房:京都.
- 木原清一郎・大貫耕一(2004) 教えと学びを振り返る体育の評価, 体育科教育, 52(7):152-157.
- 菊幸一(2005) 「体育はなぜ必要か 体育の存在意義を考える 社会との関係から」, 体育科教育, 53(11):152-157.
- 小林篤(1980) 授業と教材研究 教育学(6), 有斐閣:東京.
- 小林悠一・下田好行(2013) 教材辞典 教材研究の理論と実践, 東京堂出版:東京.
- 国立教育政策研究所(2012) 評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料, 教育課程研究センター:東京.
- 小松武寿・海野勇三・功力俊雄(1994) 中・高校の教科体育における「体育理論」領域の内容編成に関する研究, 山口大学教育学部教育実践研究指導センター紀要5:171-198.
- 近藤良享・長谷川悦示(2005) 筑波大学体育専門学群生のドーピング意識調査結果, 筑波大学体育科学系紀要28:191-198.
- 宮崎明世(2012) 「オリンピック教育」の実践, 筑波大学附属学校教育局附属学校オリンピック教育推進専門委員会:13-18.
- 文部省(1947) 学校体育指導要綱, 東京書籍:東京.
- 文部科学省(2009) 高等学校学習指導要領解説保健体育編・体育編, 東山書房, 京都.
- 森本弘一(2000) 教材研究のあり方, 奈良教育大学教育学部, 物理教育48:130.
- 中井大介・庄司一子(2006) 中学生の教師に対する信頼感とその規定要因, 教育心理学研究54:453-463.
- 中村敏雄(1989) メンバーチェンジの思想, 平凡社選書:東京.
- 成瀬徹(2005) 体育・スポーツの見方がかわる体育理論の教材づくり, 体育科教育, 53(11):46-49.
- 野本忠雄(1974) 高校に於ける体育理論の在り方:2 体育原理に関する研究, 日本体育学会大会号,(25):112.
- 岡田晃・黒田善雄(1990) ドーピングの現状・現実を語る, ブックハウス・エイチデイ:東京.
- 小笠原喜康(1988) 教材辞典・教材研究の理論と実践, 東京堂出版:東京.
- 大塚隆・山田洋・加藤達郎(2006) 「体育理論の基礎」体育学科・新しい科目の素顔, 東海大学紀要体育学部36:240-241.
- 佐伯聰夫(1988) 生涯スポーツと「体育理論」, 体育科教育, 36(7):14-17.
- 真田久(2008) 学校体育でオリンピックを教える意味と価値, 体育科教育, 56(8):10-13.
- 澤崎真彦・山口満・下田好行・石橋昌雄・佐島群己(2008) 「教材学」現状と展望(上巻), 協同出版株式会社:東京.
- 白石龍生・宮井信幸・森岡郁晴・宮下和久・武田眞太郎(1998) 保健授業の生徒による評価の研究, 日本健康教育学会誌5:15-21.
- 白石龍生・白石大悟(2013) 科目保健の生徒による授業評価についての研究, 大阪教育大学紀要62-1:71-78.
- 杉山重利・高橋健夫・園山和夫・菊幸一(2009) 保健体育科教育法, 大修館書店:東京.
- 等々力賢治(1996) 体育理論教育の成果と課題, 学校体育, 49(1):23-25.
- 高田典衛(1964) 「子どものための教材づくり(3) —教材づくりを望む背景—」, 体育科教育, 12(8):42-43.
- 高橋健夫(1994) 体育の授業を創る, 大修館書店:東京.

- 高橋健夫（2009）最新 体育・スポーツ理論，大修館書店：東京。
- 高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖（2010）新版 体育科教育学入門，大修館書店：東京。
- 高橋健夫・大築立志・本村清人・寒川恒夫・友添秀則・菊幸一・岡出美則（2012）基礎から学ぶスポーツリテラシー，大修館書店：東京。
- 竹田清彦・高橋健夫・岡出美則（1997）体育科教育学の探求，大修館書店：東京。
- 竹村瑞穂・重松大・小林大祐（2011）「自由意志によるドーピング問題」をめぐる倫理間対話，体育・スポーツ哲学研究33-1：27-40。
- 等々力賢治（1996）体育理論教育の成果と課題，学校体育，49（1）：23-25。
- 友添秀則・近藤良享（2000）スポーツ倫理を問う，大修館書店：東京。
- 友添秀則（2001）体育に理屈はいらない？なぜ今、スポーツ文化を学ぶのか，体育科教育，49（5）：44-47。
- 友添秀則・岡出美則（2005）教養としての体育原理，大修館書店：東京。
- 友添秀則（2008）スポーツの今を考える，創文企画：東京。
- 友添秀則（2009a）体育の人間形成論，大修館書店：東京。
- 友添秀則（2009b）いま、なぜ体育に「知」の学習が必要なのか，体育科教育，57（10）：10-14。
- 友添秀則・佐藤豊（2011）楽しい体育理論の授業をつくろう，大修館書店：東京。
- 梅津正美（1994）高校地理歴史科「世界史A」の教材開発，広島大学附属福山中・高等学校中等教育研究紀要34：1-13。
- 梅津正美（2010）規範反省能力の育成をめざす社会科歴史授業開発，全国社会科教育学会社会科研究73：1-10。
- 宇土正彦・高島稔・中塚義実（1983）体育科教育法入門，大修館書店：東京。
- 和唐正勝・高橋健夫（2013）現代高等保健体育，大修館書店：東京。
- 山口満・小野瀬雅人・石橋昌雄（2008）「教材学」現状と展望（上巻）日本教材学会設立20周年記念論文集，協同出版：東京。
- 依田充代・北村薫（2012）ドーピング知識とスポーツ観の研究，運動とスポーツの科学，18：29-40。
- 吉中孝志・海野勇三（2009）中学校体育科におけるオリンピック教育の試み，山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要27：59-70。

Experiment in lesson planning in senior high school physical education theory Development of a lesson evaluation scale for the unit on doping and sports ethics

Hiroshi MATSUDA

Department of Health and Sports Science,
Faculty of Welfare and Health Science,
Fukuyama Heisei University

Abstract

In 2009, new curriculum guidelines for health and physical education in senior high schools were announced; these required practical lessons in physical education theory. In addition to the performance of exercise and sports, the study of the cultural value of sports became a requirement. It is extremely important to study physical education theory in the course of the implementation of physical education, wherein students are taught methods of performing exercise and sports, the principles and rules of exercise, and the cultural significance of physical education. A study was conducted examining prior research on the characteristic details of modern sports and prior research on education in the subject of physical education. The importance of establishing ethical standards (Sanada, 2008) related to the Olympic movement and doping and the significance of anti-doping education in order to ensure the value of sports (Yoda, Kitamura, 2012) were determined. It was also clarified that doping not only damages the health of players but also contravenes sports ethics; further, it was concluded that the abuse of medicine is a despicable act that is a hotbed of social ills (Tomozoe, 2012). However, extremely few practical lessons attempt to capture the diverse backgrounds of doping. Therefore, in this study, materials were produced for lessons on the doping and sports ethics unit in the field of physical education theory, based on the Olympic movement and doping unit; in the implementation of these lessons, a lesson evaluation was created using the materials produced. Specifically, a lesson evaluation scale was produced, experimental lessons were conducted, and data was gathered and analyzed. A disparity was seen in two of the three factors, but there was no disparity in the third factor. On this basis, it became necessary to amend and improve the teaching materials. Thus, the proposal was made to promote the production of teaching materials in the area of physical education theory, which is where the significance and value of sports are taught in the early stages; thus, systematized study materials are to be constructed and the effectiveness of the production of teaching materials is increased.

KEY WORDS : Physical education theory, doping, ethics